

VI おわりに ―― そして人生はつづく

最後に、愛について語っておきたい。

一般人を取材対象とするバラエティー番組の場合、制作者や出演者がもっとも大切にしなければならないのは、その対象とした人たちへの愛ではないだろうか。この分野には多くの先達がいるが、たとえばラジオ番組で活躍する毒蝮三太夫氏がいくら「ババア」「ガキ」と連呼しても、そう言われた当事者もリスナーも不快に感じないのは、彼のパーソナリティーもさることながら、何より彼の一般の人たちへの愛が深いからではないだろうか。

では、放送における愛とは何だろう？

これはけっして抽象的な問いではない。テレビやラジオの制作現場において表現される愛とは、そのまま技術やテクニックと呼び替えられるべきものだからである。

愛にはさまざまな形がある。もちろんそれは、取材相手の言うことを鵜呑みにすることではない。それどころか、逆である。相手が口にしたことや、その容姿から受ける印象を「ありのまま」に視聴者という不特定多数の目にさらすことは、むしろ愛の欠如、演出の放棄である。

ディレクターや出演者は、その人の言動が視聴者にどう受け取られるか、そのひと言を放送することによって、果たして彼や彼女の生活や人生に悪影響が出ることはないだろうか、とまず考えなければならない。そのうえで、場合によっては予見される視聴者からの揶揄や拒絶反応を先回りし、その場でその相手をかばい、救うような冗談や言葉を発しておくこと――そのような機敏な判断と発話が、ディレクターや出演者には求められているはずである。それができるのが、プロであろう。

できれば撮影現場で、かなわなければナレーションで、それも無理ならスタジオトークで、取材対象とした人のネガティブと受け取られかねない側面を、個性として光らせ、あるいは本人も噴き出すような笑いに転化しておくことによって、制作者・出演者は彼らの人生を、生活を守ることができる。

それは、高度ではあるが、このジャンルの番組制作に挑もうという志のある制作者や出演者なら、身につけておくべき必須のテクニックであると考えていただきたい。

＊

本件番組のロケ・ディレクターは私たちのヒアリングに答えて、取材に応じてもらった人たちが視聴者にどう思われるかについて、「そこまでは思い至らなかった」と率直に述べていた。これは、被取材者の発言内容の責任は本人自身が負うべきものだ、と突き放していたということである。

しかし、取材者は無色透明な媒介ではない。現場に出て取材する者は、番組内容全体の責任を最前線で背負っている、ということを忘れないでほしい。多大なプレッシ

ヤーのなかでロケ・ディレクターをつとめたこの若い制作者には、今回の失敗を「取材者の責任とは何か」「放送における愛とは何か」ということについて考える契機にしてほしい、と私たちは切に願っている。

では、彼が取材してきた素材をもとに演出プランを作り、スタジオ収録し、放送に至った幹部制作者たちはどうなのか。彼らには番組に協力してくれた人たちへの愛があったのだろうか。私たちは彼らにもやはり「放送における愛とは何か」を考えていただきたい、と言っておきたい。

*

テレビ東京が委員会に提出した報告書のなかに、今回の事案は「ヒューマンエラー」だったと述べる一節があった。本件番組は単なるエラーではなく、かなり意図的に現実を歪め、視聴者を誤った認識へと導く演出が行われていたことは、上に見てきたとおりである。

だが、ともあれ番組も人間が作っている以上、こうした誤った作為やエラーをすべて確実になくすことは難しいかもしれない。しかし、都市であれ、へき地であれ、一般市民を取材し、その人たちの仕事や生活の様子を番組化するというテレビならではの表現に足を踏み入れる制作者は、自分は人々の暮らしや人生を大きく傷つける危険とつねに隣り合わせにいるのだと肝に銘じたうえで、その一歩を踏み出してほしい。

普通に生きている人たちの人生はゲームではない。たんなる演技でもない。取材された人たちにとってはエラーではすまされない現実の人生が、放送のあともずっとその町で、その村で、その場所であつづいていくのだから――。